

夏目漱石にみる 「修善寺の大患」との「則天去私」最晩年 (濱名均)

- ・明治43年（1910年）6月「三四郎」「それから」、「門」の前期三部作執筆中に胃潰瘍で入院。8月に療養のため伊豆の修善寺の菊屋旅館で転地療養
- ・そこの地で胃疾患で大吐血～これが世にいう「修善寺の大患」である。この時に一時的な「死」を体験したことは、その後の作品に影響を与えることになった。
- ・最晩年の漱石は「則天去私」を理想としていたが、この時の心境を表したものでないかと言われている。
- ・濱名の好きな「草枕」は1906年9月で、デビュー作品「吾輩は猫である」(1905/1～06/8)、「坊ちゃん」(1906/4)から数えて3番目の作品である

夏目漱石の「草枕」

- 岩波文庫では、一、として冒頭の「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。」この部分は誠に「人口に膾炙」しているフレーズです。

しかしながら漱石の主張の神髄はこの後に続く、

「住みにくさが高じると、安い所へ引っ越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生まれて、画が出来る。」「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向こう三軒両隣にちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。」「あれば人でなしの国に行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。」~~~~~続きます、(一)はこの後、12ページに渡っています。

この(一)の12ページだけを読んで、思索すれば、立派な論文に変換できるように思います。

- 明治期（明治20年代）の東京大学に学び、国費でのイギリス留学（明治33年～）を行い、西洋文明を吸収した夏目漱石のこの草枕の(一)で表現されている極めて「仏教的なモノの見方」こそが、（西洋文明の最先端をオーバーし過ぎた）アメリカの属国・日本が、そのくびきから解放される時が来た時に、地に足をつけて歩む際に「こころの支えになる」のではないかと思います。